

ヨーロッパの旅 (一)

平井信義



旅というものは、楽しくもあり、また、もの悲しいものである。今回の一ヵ月にわたるヨーロッパの旅も、日中の活き活きとした生活から、夜のホテルの部屋に入ってみると、もの悲しさが私の心を占める毎日であった。暗い電灯の下で、その日一日の行動を思い返してみる。見たたり聞いたりしたことについて考えてみる。それらは、十五年前に来たとき、そして五年前、一昨年と、以前に来たときのことを背景にして綴られていく。しかし、すべてが私自身の変化と日本の変化とにかかわり合いを持ってくるのである。

第一回のヨーロッパの旅は、日本がようやく立ち上がろうとしている時代を背景としていた。海外の旅行者も少なく、海外にいったという事で珍しがられる時代であった。また、後進国に属

しているという意識が強くなった。私自身も、ヨーロッパの研究や生活から学び取ることはかりを考えていた。ひたすらに学び取

ることを考えていた、といってもよい。しかし、今回はちがう。学び取るものもあるだろうが、教えるものもある——という気持が強く、あるいは、与えるものの方が多いのではないかとさえ思っていた。また、わが国の経済力の振興も、ヨーロッパの隅隅にまで及んでいた。カメラとか、トランジスタラジオとか、時計とか、日本の製品がヨーロッパに幅広いスペースをとっていたし、それらを手にしている数多くの白人の姿を見ることができた。私の足取りは、十五年前にくらべて、はるかにしっかりとヨーロッパの大地をふみしめていた。

しかし、ホテルのベッドに仰向けになって、ひとり、天井にう

つるランプの傘の影を眺めていると、悲しさがこみ上げてくる。いったい、何のための旅なのであろうか？ 人生の一齣であるこのヨーロッパの旅は、私の人生に何をもたらしているのでしょうか？ その人生の旅は、私にどのような意義を与えようとしているのか？ 私自身、人生にどのような意義を見出しているのでしょうか？

十五年前にヨーロッパをはじめて訪れた時には、私は、芭蕉の「奥の細道」をたずさえてきていた。なぜ「奥の細道」を選んだのか、はっきりとは思いつけないが、出発に先立つ忙しい日々の中で、携帯に不便をしないということも考えながら、私の書棚をあれこれ眺めているうちに、ふと手にしたが、岩波文庫のこの本であった。

この本の思い出は、更にさかのぼる。それは、高校時代であった。三々四人の友人と、俳句の本の輪読をしながら、作句に努力をしていた頃、最も強く私の心を引いたのが、この「奥の細道」であった。旅のあわれをあくことなく表現している。特に私は「行く春や 鳥啼き魚の 目は涙」が好きであった。

このようにして、私と共にヨーロッパの旅に誘われたこの本も、ヨーロッパ滞在の一年間に、ほとんど開かれたことがなかったの

である。いつも私の鞆の中にありながら、あるいはパンシオンの机の上に置かれながら、ほとんど開いて読まれることはなかったといってもよい。読む気持が起きなかったのである。

今回のヨーロッパの旅の鞆には、「奥の細道」は入らなかった。そのことを考える暇がなく、旅立ったのである。しかし、ホテルの一室のベッドからだを横してみると、「奥の細道」がしきりに思い出された。芭蕉が旅に身を託したその当時の思いが、はっきりとではないにせよ、私にも感じ取られるのであった。

芭蕉が旅をしたあの頃は、すべて徒歩であった。駕が、唯一の輸送機関であった。私の旅は、主として飛行機である。羽田を夜の十時に飛立った飛行機は、三々四時間の後に朝を迎え、アンカレッジに着き、日の出の頃の状態を維持しながら北極を通って朝の六時にコペンハーゲンに着く。そこには、時間の移り変わりに、全くの狂いがある。暁の状態が七々八時間続いても、それは飛行機にまかせることになる。窓外を見ていると、まさに朝日が雲の上に輝く状態が、延々と続いて果てしない感じであり、もしこのままの状態が永遠に続くならば、人間的な変化のない状態に追い込まれて、あるいは、とりとめのない人生を送るようになるかも知れないとさえ思われた。

しかし、同じ暁の状態を維持しながらも、小窓からの光景は刻々と変化する。アンカレッジを飛立ってから、間もなく、左の窓

外にはマッキンレー山脈がそびえ立っている。全山雲におおわれた山肌は、朝日にきらめき、雲を従えていた。山脈が遠のくと、眼下には坦々と続く茶褐色の広原。その間に、河がうねうねと細く太く走っている。無人の広原である。古今東西、この地が人間にとってどのような意味を持っていたのであろうか——など考えてみる。

人間嫌いとなった時、あるいは好きな人と二人だけで、このよな土地に来たならば、どのような生活が展開するであろうか——などとも考えてもみる。

大学時代に人間嫌いとなり、人里離れた一軒屋に住んでいたことを思い出す。好きな本（当時は、中勘助の著作集）を読みながら、好きな時に食事をするといった生活だったが、一週間にしてその生活に堪えられなくなっていた。山の奥の一軒屋であるから、誰かが訪れてくるということはないはずであるのに、家のまわりでコトツと音がすると、誰かが来たのではないか——と思うようになった。しかし、それが風の音であり、ひどく失望したものであった。自分には、孤独の生活には耐えられない性格がある——と、当時はそのように思い込み、間もなくその一軒屋を去ってしまったのであった。しかし、もし、好きな人といっしょなら——そんな空想をした若い頃であった。好きな人のイメージを頭に描き、二人だけの会話を空想したりしたのも、その一軒屋にお

いてであった。

飛行機が北極に近づくとき、流水が漂い始める。それらは、弧を描き、角をつき合わせながら、白く淀んでいた。恐らく、何十年、何百年にわたって氷りついたまま、漂っているのかも知れない。

私は、刻々と変わっていく流水が画く模様のあれこれを見詰めたが、芭蕉がこのような飛行機の旅をしたならば、どのような思いに耽るであろうかと、考えていた。一步一步、大地に足を踏みしめながら、道ずれに咲くすみれの花をいとおしむことのできた時代。何百キロを数時間の中に飛びながら、一万メートルの空から、人の住んでいない氷の丘や海の上を見下ろす時代。この二つの時代をどのように結びつけて考え、その中から、どのような生き方を見出せばよいのであろうか？

私が青年であった頃、空には軍用機がきかんに飛び交っていた。東の丘に姿を現わした飛行機が、私の立っている砂浜の上空を、たちまちにして過ぎ去り、そして、西の彼方に消えていく。その速さには、目を見張るばかりであったし、羨む気持さえ湧いたものであった。しかし、ふと我にかえて、足許の砂を手ですくい、さらさらと指間をぬって落ちていく小さな粒に、限らない愛着を感じたの思い出す。この一粒一粒にも、我々にとって大きな意味があるのだ——そう思った時、一瞬にして大空を飛び去ること

のできる機械にのみ人生があるとしたり、一粒の魂を忘れてしまうことになるのだ——と思ひ返したのであった。

しかし、今、飛行機の上から、広大な地球の一部を眺めている自分は、どのような位置づけをもっていると考えればよいのだろうか？

再び、青年であった頃のことを思い出した。それは夏の夜、浜辺に坐つて星空を仰いだ日々のことである。私は、こうして星空を眺めるのが好きであった。満天にちりばめた星が、あるいは大きくあるいは小さく、輝いたかと思うと消え、消えたかと思うと輝く——そのような変化を眺めていると、時のたつのを忘れてしまふのであった。しかし、無数の星の一つ一つは、地球と似た巨大な塊りである。その巨大な塊りで構成している我々の太陽系。何と大きなはてしない空間なのであろうか。そのような空間が、他の太陽系として、まだまだ無数にあると聞いている。無限に近い宇宙の中の一つの太陽系、その太陽系の中の一つの星である地球の小さな区画にある日本、その中にある一つの浜辺に坐つている自分——このように考えてみると、自分というものがいかに小さな存在であろうかと、はかなく感ぜられたのであった。

このような思い出に駆られながら、飛行機の一座席を我が家として、小さな円窓から、地球のはてを見たのは、今回がはじめて

であった。以前の旅の折には、飛行機にのると、思いは既にヨーロッパにあった。ヨーロッパの国々の、美しい家並やそこに住んでいる人々や、知己の師や友人のことに、私の思いは結びつけられていた。特に最初のヨーロッパの旅では、どのような生活が展開されるのか、不安と緊張のうちに、睡りたくもねむることのできないような飛行旅であったし、隣席の人との慣れない会話が、いっそう私を不安にしたのを思い出す。

今回のヨーロッパの旅の目的は、いくつかに分けられる。その第一は、ウィーンで開催される国際治療教育において、講演することにあつた。それは、会長のアスベルガー教授から、一年も前にご連絡があつて、日本における自閉症児の治療教育について話すようにいわれていたことであつた。アスベルガー先生の自閉症児に対する根本的な考え方の線に沿つて、われわれはその治療教育に専念してきたのであるが、その成果を話す機会に恵まれたことは、非常な喜びであつた。

第二の目的は、ヨーロッパの他の国々で、自閉症児をどのように治療し教育しているかを実際にこの目で見るとともに、そこで働いている人々と話し合うことにあつた。文献で知った範囲の研究者に連絡して、その約束を取りつけたのであるが、その数は少

なかった。それというのも、自閉症児の治療教育に専念している人々が、意外にも少なかったからである。

自閉症児というと、非常に特別な子どものように思う方があるかも知れない。確かに、集団適応の面から見ると、むずかしい子どもである。しかし、一人一人の子どもの立場に立ってその理解を進めていくと、特別な子どもとは思えなくなってくる。その行動のほとんどが、普通に育っている子どもたちに現われる行動である。しかも、その行動をはっきりと、厳然とした態度で示してくれる。いやであれば、いや——という態度をはっきりと示すから、どうしても教育の方法を考え直さなければならぬ立場に追い込まれる。どのようにしたら、その子どもに合った本当の教育をすることができるかを、考えさせてくれるのである。真の教育は、このように、一人一人の子どもを本当に理解し、それぞれに合った教育をすることはなからうか。

今日の教育は、子どもを集団に適応させることに焦るあまり、あるいは集団適応という美名にかくれて、一人一人の子どもを大切にするという精神を忘れて、子どもを教育しているのではないだろうか——このようなことを教えてくれたのが、自閉症児である。私も、自閉症児に接して、真に彼らの在り方を理解するまでは、集団適応の面にのみ心を奪われ、一人一人の子どもについて理解が浅かったことを反省させられる。自閉症児の教育に徹する

ことは、普通の子どもの教育の真髄に迫るものであると考えようになった。従って、各国において、自閉症児がどのようになっているかは、一般の教育の問題を考える手がかりともなる。

そのことに関連して、この「幼児の教育」にも大へんつくされた倉橋惣三先生のお言葉がよみがえってくる。

「子どもはね、朝、園にやってきて、私に挨拶するその仕方が、さまざまですよ。おはようございますって、ていねいに頭をさげる子どもがあるかと思うと、いきなり私に飛びついてくる子どももある。ちょっとだけ、私をつついて、通り抜けていく子どももある、かと思うと、赤んべーをしていく子どももある。いろいろですよね」

この言葉は、くり返しくり返し私の脳裡に浮かんでくる言葉である。子どもの心としっかり結びついた子どもの姿を大切にすることを教えてくれる。自閉症児は、流し目の挨拶しかしないかも知れない。飛びついて来て離れようとしないうかも知れない。それは、教育者との対応の中で、本当の心を現わしているのである。一言に、「お、は、よ、う、ございます」というように命ぜられ、それに従っている子どもからは、涙みとることのできない心の交流の大切さを、自閉症児は教えてくれるのである。(つづく)